

# カンボジアなどでの支援を紹介

地域水道支援センター オンラインセミナー開く

緩速ろ過技術を柱に中

小規模の水道を支援してきた地域水道支援センター(CWSC)は、ききころ、「緩速ろ過/生物浄化法セミナー2021」をオンラインで開いた。橋本淳司理事(アクトアスフィア・水教育研究所代表)の司会で、

「SDGs6達成へ向けた『水』の国際貢献と小さな水道」をテーマに、ウォーターエイドジャパン事務局長の高橋郁氏と名古屋環未来研究所の伊佐治明氏(名古屋市上下水道局OB)が講演。

講演者と参加者のディスカッションや、保屋野初理事長(星槎大学教授)によるCWSCの活動紹介が行われた。

高橋氏は、開発途上国の水と衛生に特化して取り組んできたウォーターエイドの支援について説明した。今年7月時点で

は、全世界の約7億7100万人が安全な水の確保が困難で、17億人が衛

生的なトイレを利用できない状況であり、2030年までにSDGsのゴール6「安全な水とトイレを世界中に」の達成が非常に困難だと指摘。主な要因として、水イン



保屋野氏



橋本氏

フラ整備後の維持管理体制の不備を挙げ、持続可能な水インフラの実現を目標に、技術支援に加え、仕組みづくりにも注力した各種プロジェクトに取り組んでいるとした。

カンボジアでは、水と衛生分野を管轄する複数の省庁が、重複したエリアに施設整備計画を立案する事態が度々発生していたことを受け、省庁横断的に情報共有しつつ施設整備を行える教育支援プログラムを提供。水と衛生分野の施設整備が不十分な東ティモールでは、スタートアップ企業が開発したスマートフォ

ンで、気軽に水源などのデータを収集可能なアプリを活用し、収集したデータをもとに施設整備計画の策定につなげた。料金徴収システムが不十分なタンザニアでは、

プリペイド式電子決済システムを導入することで、給水設備の利用者から簡単に利用料金を徴収可能な仕組みを構築し、料金収入を設備の維持管理やサービスの拡大に回せるようにした。

インドのオディッシュ州では、政府が整備した手



伊佐治氏



高橋氏

押し式ポンプの井戸の水源から高濃度のフッ素が検出されている状況。政府は水と衛生分野の事業に十分な予算を確保する

一方、村の意思決定機関が機能不全に陥っているため、村の意思決定機関と住民との間で政府への要望をとりまとめるワークショップや、フッ素汚染の回避が可能な浅井戸への転換などの支援を行った。

伊佐治氏は、名古屋未来研究所がJICA草の根技術協力事業として取り組んだ、カンボジアのシエムリアップ州の村落における家庭用浄水器の検討結果とPR活動を紹介した。村落の井戸水

は、乾季には地質の関係から鉄分の濃度が上昇し、悪臭が生じる一方、雨季には地表水の人為汚染の影響を受け、細菌類が検出される傾向が強くなる」と指摘。多くの家庭では、セフミックフィル

ター型やバイオフィルター型の浄水器を設置して対応しているが、容器

衛生な状態のまま使用されているなど、衛生面の課題を抱えているという。

そうした既存浄水器の課題解決に向け、伊佐治氏は、前処理を行う粗ろ過槽と緩速ろ過槽を組み合わせた新たな浄水器を製作。現地でも流通している宅配用ポトルウォーターを活用した、粗ろ過と緩速ろ過を二槽で行う簡易タイプも開発した。住民が自ら製作可能な現地で調達できる部品を用いることが特長で、安価で維持管理性の高い浄水器が完成した。中学校で浄水器の製作指導をした後、文化祭で生徒自身から村民に装置を紹介してもらうなど、PR活動に力を入れたことが奏功し、浄水器の特長を村民に広く周知することができたという。

保屋野理事長は、CWSCの活動について、岡山県津山市で5集落6カ所の小規模水道供給施設の提案と設計監理を行ったほか、大分県豊後高田市黒土地区で超小規模の生物浄化施設(粗ろ過で前処理した緩速ろ過方式)の設置に貢献するなど、多くの実績を積み上げてきたと説明。「国内での未普及地域の解消や、海外での農村部での集落給水の必要性など、小規模水供給に関わる適正技術のニーズが国内外で大いに高まっている。我々の活動に関心を寄せていたとき、多くの方の参加をお待ちしている」と呼びかけた。